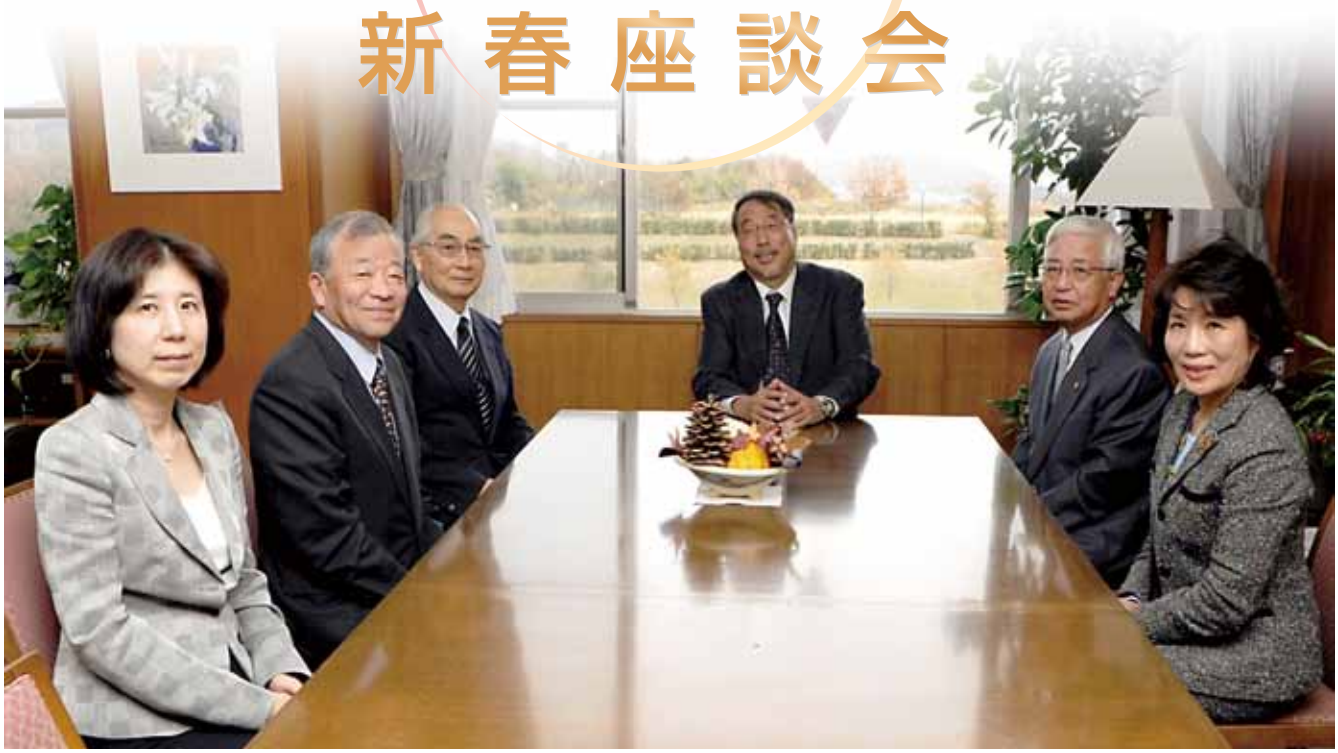
人にまっすぐ。

天遊 16

winter.2011
大阪教育大学　広報誌

経営協議会委員と学長による

新春座談会



2004年の国立大学法人化にともない、外部有識者の参加を含めた経営協議会が設置されることになりました。
この経営協議会は主として大学の財務経営に関する事項の協議に当たることになっており、本学でも学長の任命する6人の外部委員に参加いただいております。2011年の新春に当たり、経営協議会外部委員と長尾学長との座談会を企画しました。（広報室）

現代の若者気質について

長尾　新年おめでとうございます。経営協議会委員の皆さまには、常日頃、大阪教育大学の取り組みに対し貴重なご意見をいただいています。

年頭に当たり、昨今の若者なり、学生をどのようにみておられるのか、また大阪教育大学へのご要望、ご提言をいただきたいと存じます。

まず、梶本委員にお尋ねします。梶本委員は大阪府の副知事をなさってきたいわば行政のプロで、その経験からお話をいただけますでしょうか。

梶本　最近の若い職員をみていると、“指示待ち”人間が多いですね。われわれの年代に比べ学力は非常に優秀で、指示したことについては短時間で完璧に近い資料を作ってきます。しかし、自ら考えて積極的に行動することが少ないように思います。教育現場の実態は知りませんが、若者気質という点では同様の傾向があるのではないかと危惧します。

虐待、いじめ、不登校など、これだけ子どもたちの問題が増えている現状を考えると、まずは、子ども自身、家庭、その背後にある社会に起こっている問題をいち早くキャッチする感性が必要です。そして、感じ取った問題について、対応を考え、実践する行動力をもった人材が求められていると思うのです。頭のよい人はたくさんいますが、現実と向き合い、解決にむけ体当たりするバイタリティーに溢れた教員を輩出し、学校現場に送ってほしいと思いますね。

長尾　“指示待ち”人間が多いという梶本委員のお話でしたが、皆さんはいかがでしょうか。

辻井　わたし自身の職場をみても、そう思いますね。それに対応するためには、若いうちに経験をたくさん積ませるということが大切ですね。とくに修羅場を経験させること。結果を出してきたら大いに評価し、ほめるということが大事です。

長尾　マスコミ出身の竹村委員にお尋ねします。行動力を求められる記者の中にも指示待ち人間はいるのですか。それでは務まらないのではないですか。

竹村　メディアの世界でも同じだと思います。取材相手とトラブルになりたくないという意

INDEX
1 2 3 新春座談会
4 5 ラボ訪問
6 7 8 教育実習学生奮闘記
1 2 3 4 STUDENTS NOW 特集
9 MY LIFE WORK
10 11 12 13 卒業生CATCH
14 15 16 附属学校園ウォッチ TOPICS

長尾学長

識をもつ記者が多くなったようには思います。意欲はあるけど困難は避けたい。本来だと、情報として5くらいは取らないと、しっかりした記事が書けないのに、2～3くらいでやめてしまう。それで間違った報道をして迷惑をかけてしまい、かえってトラブルに対して神経質になってしまう。困難に打ち勝った体験が欠けているように感じます。

長尾　それでは、続いて高橋委員にお願いできますでしょうか。

高橋　内向きの傾向が出てきたのでは？留学件数も減ってきています。自分に快適な状況からあえて外に飛び出そうとしない。さまざまな人々と出会い、異質な考え方をぶつけ合うのを避け、同質を好む若者が増えつつあるような感じがします。そうなると変わった存在は認められず、はみ出してしまいます。大学や職場でも疎外感をもち、引きこもりがちになっていく人も多くなるのです。

好むと好まざるとに関わらず、学生たちが今後向き合わなくてはならないグローバル時代は、違いを個性として尊重するダイバーシティ（多様性）社会ですが、逆行している感があります。一方、大学にとっても、多様性をなくしてはその生命である創造力が痩せていくのではと心配です。

長尾　では、話題を変えまして、「大阪教育大学に期待する」というテーマに移らせていただきます。

大阪教育大学に期待する

高倉委員は、平成13年11月22日に報告書を提出した「在り方懇」（文科省『今後の国立の教員養成系大学・学部の在り方についての懇談会』）の主査として活躍されましたが、これからの教員養成についてアドバイスをいただけますか。

高倉　「在り方懇」というのは、国立の教員養成系大学・学部の文字どおり「在り方」について検討した会議で、「国立」と「教員養成」という2つの制約がついているのです。しかし、昨今の財政的な状況から、「教員養成」という部分が吹っ飛んでしまっています。国立の大学に一般的に適用されるという「在り方」になっているようです。つまり、規模の小さい大学を各県に置いておくというのはいかがなものか、束ねて統廃合していこうということが、教員養成系大学としてではなく国立大学統廃合のサンプルとして出されてしまうのです。

もう1つ、「在り方懇」の報告書では、教員養成系大学・学部が本当に教員養成に徹しているのかということについて、疑問を投げかけています。

そこで、報告書は、大学院と附属学校を含めて、教員養成系大学・学部の「在り方」（改革課題）を提示しました。大阪教育大学が、今日的課題に対応した教員養成・研修の中核的な大学として、さらに発展していくことを期待しております。

さらに問題になるのは、ゼロ免課程の問題です。大阪教育大学の現状で言えば、教養学科の改革をどうするのかという話です。リベラルアーツと教員養成の教育組織の相互補完の充実をめざして、「がんばれよ！」というのがわたしのメッセージです。

高倉委員

人間的魅力のある人材育成を

長尾　力強いエールをいただきました。それでは、次に辻井委員にお尋ねします。経営協議会は、“経営”に明るい方、企業経営の第一線で活躍された方にもメンバーになっていただいています。辻井委員は近畿日本鉄道株式会社のトップマネジメントを担ってこられました。本学が法人化大学としてうまくいっているのかどうか、ご意見をおうかがいしたいと存じます。

辻井　大学には教育研究とマネジメントの2つの柱がありまして、経営協議会ではマネジメントに関して意見を述べさせていただいています。そういう視点からすると、しっかりやっておられると思います。

かつて会社で管理職を評価する際に、会議の場でどのくらい発言するかをみていました。積極的で意欲のある人間はぱっと手を挙げる。その発言のプレゼンテーションが非常に上手です。もう1つは、話題豊富でないといけないと言っています。プレゼンテーションの上手さに加えて話の中身も「なるほど、たいしたものだ」と感心させないといけないのです。中身には2つポイントがあって、1つは専門分野です。もう1つは専門外で、いうなれば教養です。専門は優れているが教養は欠けているなということではいけません。両方がうまくバランスがとれていることが大事なのです。もっと言えば、専門は深く、教養は広くというのが望ましい。それを上手くプレゼンテーションする人は目立ちますし、どんどん伸びていくと思います。

高橋委員

教師のステータスを上げうる大学に

長尾　さて、竹村委員はマスコミのご出身ですが、その立場からみて、大学及び教育をどのようにお考えですか。

竹村　メディアの側からみると、大阪教育大学は非常に評判のよい、落ち着いた大学だと思います。ただ、大学広報という視点から言わせていただくと注文があります。

「広報」にはPRの面と、危機管理の面の、2つの役割があると思います。大学で言えば、大学のやっていることのPR的な側面、もう1つは問題が起こったときにどのように対応するのかという面です。

1つ問題が起こりますと、読者をはじめ各方面から、もっと学校を叩けとか、問題点をもっとあぶり出せだとか、非常に高圧的な意見が舞い込んできます。実際に、そう言われればそうだというようなうなずける例がたくさんあるのです。例えば、昨年、頻発した子どもの自殺にしても、学校や先生は十分な調査も謝罪も行っていないと見えるような事例がありました。

そのような例が重なって今、教師のステータスが全体的に見て低くなっているのではないかと思うのです。そしてその原因に、先生方の危機管理の甘さがあるのではないかと思うのです。問題が起こったときに、本当に問題点をきちんと把握して、正直に公表したうえで、改善策を講じるということができず、とかく後手に回ってしまうということです。

そこで誤解が積み重なって、余計に教育への批判を招く背景になってしまっているのです。だから「最近の教師はだめだ」となり、教師自身の評価が上がらず、いきおい教師の給料などこれ以上あげなくてもいいのだとなる。そして、教師になっても面白くないという若者の気持ちが広がってしまい、教師をめざす人が減るという悪循環になるのです。そこは、教師、学校の現場から間違いを正さないといけないと思うのです。そのためにも大阪教育大学が社会に求められる人材を育て、適切な危機管理と十分な情報発信で、教師のステータスを上げうる大学になっていただきたいと強く思うのです。

辻井委員

梶本委員

豊かな多文化共生の場に

竹村委員

長尾　では最後になりましたが、梶本、高橋両委員にお願いします。

梶本　先ほども申し上げましたように、感性と知性と行動力をもった教員を養成してほしいと思います。教員免許をもっているだけではない、さすが大教大出身だなと言われてほしいですね。

そのためには、大学も教員も現状に甘んじるのではなく、社会の変化、要請に応えるために絶えざる改革を進める必要があると思います。長尾学長の牽引力によって、かなり意識が変わってきたように思いますが、さらに全学、全教職員がスピード感をもって変革を進められることを期待します。

高橋　大教大が人間をつくる教師養成のパイオニアであったDNAを大切にして、国民の人格の基礎づくりという原点を忘れないでいただきたいです。

内外で長く外国人と接してきて、日本人の資質は誇るべきところが多いと実感しています。ただ優しい"草食系男子"とは裏腹に、「強さと自己を客観視する能力」が他国に比べて少し弱い。今盛んに言われているコミュニケーション力養成の基本は「立ち位置を自覚した自己主張力」だと思うのですが。

"能ある鷹は爪を研ぎ、出ない杭は腐る"国際社会でたくましく生きていくのに、若い間のさまざまな異文化体験は重要な教育なのです。大教大に留学生を増やし、豊かな多文化共生の場にしていただけたらと思います。

長尾　どうも有り難うございました。

2011年の幕開けにふさわしい座談会になったと思います。本年もどうぞよろしくお願いします。

出席者（敬称略）

梶本　徳彦・・大阪府社会福祉協議会会長/大阪府立高津高等学校同窓会会長
高倉　　翔・・財団法人日本高等教育評価機構副理事長/筑波大学名誉教授/文部科学省初等中等教育局視学委員/前明海大学長/元中央教育審議会委員
高橋　叡子・・追手門学院理事/日本中小企業福祉事業財団理事/元大阪府教育委員会委員 元国土庁（現国土交通省）国土審議会近畿整備圏委員
竹村 登茂子・・読売新聞大阪本社広報宣伝部長
辻井　昭雄・・近畿日本鉄道株式会社相談役
長尾　彰夫・・大阪教育大学長・司会

※俵正市氏（俵法律事務所）は所用のため欠席致しました。

大教、ミル・キク・シル

ラボ訪問

File.008

教員養成課程保健体育講座
教授 三村 寛一

運動がヒトの身体諸機能に与える生理学的応答

研究成果は学生らの
協力の賜物！

三村教授は約30年間、幼児から高齢者までの幅広い年齢層を対象に、運動がヒトの健康にいかに役に立つかについて研究し、約300本の論文を作っています。特に、幼児、児童については、数多くの科研費や国の委託研究を受け、最先端の機種器材を駆使した研究を行い、貴重なデータの検証をしています。現在も文部科学省が作成中の「幼児期における運動指針の策定」のメンバーとして活躍しています。

三村研究室では、大きく3つの面から研究を進めています。1つは子どもの肥満、体力、運動能力、心肺機能、日常生活の身体活動量に関する研究です。平成12～22年度の10年間に、文部科学省の科研費を5回取得し、幼少時の肥満、体力運動能力の低下の原因について検証しました。

2つ目は、マラソン等のスポーツ選手を対象とした、最大酸素摂取量、心拍数、乳酸などの呼吸循環機能の特性についての研究です。ダイハツ陸上競技部選手のサポートや、公開講座の「楽しいジョギング教室」の開講のほか、教授自らホノルルマラソンに参加し、レース中の心拍数を連続測定しながら20回出場、完走しています。

3つ目は、中高齢者を対象に体力測定や日常生活での身体活動量を測定する、予防医学的視点からの研究です。特に、大阪府医師会と連携して、府内の市民を対象に体力測定及び健康相談を20年間実践しています。

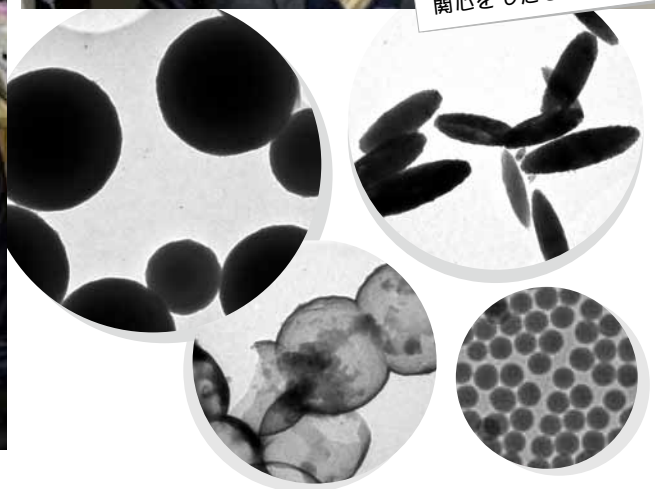
また最近では、企業や研究機関と連携し「子どもの骨密度装置の開発及びその評価基準の作成に関する研究」を進め、幼児から20歳の子どもの骨密度測定装置を開発しました。また、その評価ソフト、DVD及び冊子を作成し、教育現場に寄与するとともに学校医を中心にそれらの普及活動を展開しています。さらに、0歳～11歳の乳児、幼児、児童4,304人を対象にピドスコープ装置を用いて足の裏を測定し、発育過程における土踏まずの形成を分析し、「The formation of foot Sole Contact Surface in Japanese Preschool Children」のテーマで昨年9月にカナダで開催された「世界小児スポーツ医学会」において発表しました。現在は、本学の女性事務職員18人を対象に2か月間の加圧トレーニングの研究をしています。これらの三村研究室での研究成果は研究室の大学院生を中心に学生や卒業生の協力の賜物であると三村教授は熱く語っていました。

File.009

教員養成課程理科教育講座
教授 神鳥(かんどり) 和彦

毎授業、理科実験のパフォーマンス

子どもたちに興味・関心をもたせる使命！



「わたしの授業では、学生に演示実験を必ず見せます」。特殊なビニール袋の中で水素と酸素を電気火花によって爆発させて水を生成する実験、超伝導の実験、塩化ナトリウム(塩)を石英ビーカー中で摂氏800度まで熱して溶かし、液体になった塩に電極を差し込み電気を通す実験など、毎授業、理科実験のパフォーマンスが繰り広げられています。

「君たちは理科の教師になるのだろう。それなら実験を主体にした授業をしなければならない。子どもたちに科学的な興味・関心をもたせる使命をもっているのだから」。学生たちにはこのような熱いメッセージを送り続けています。そのため、研究室では一人ひとりに自分の研究テーマをもたせているといいます。実に生き生きとした表情で語る神鳥教授は、研究者であるとともに、学生に対して懇切丁寧な指導をする教育者としての顔をもっています。

神鳥教授の現在の専門分野は「コロイドおよび界面化学」。様々な無機微粒子の調製とその性質を調べる基礎研究です。例えば、シリカゲル (silica gel) とは、メタケイ酸ナトリウム (Na_2SiO_3) の水溶液の加水分解で得られるケイ酸ゲルを脱水・乾燥したもので、お菓子の袋などに入っている乾燥剤の成分となる物質です。

現在、教授が興味をもって研究している物質は、組成式がα-Fe_2O_3で表わされるヘマタイトや$Ca_{10}(PO_4)_6(OH)_2$で表わされるカルシウムヒドロキシアパタイト等です。教授は、10～数百ナノメートル※の大きさをもつこれらの微粒子を、イオンから合成する研究をしています。また、カルシウムヒドロキシアパタイトは、人間の骨や歯の主成分であるため、タンパク質などの生体高分子との親和性が高く、これらの吸着挙動に関する研究、さらに、カルシウム以外の金属を用いた、様々な金属リン酸塩粒子に関する研究も手がけています。

一方、最近、企業からの委託でシリカ微粒子を用いて、天然のオパールのような色調を示す現象を解明しつつあります。

これらの研究で大きな武器となるのが、透過型電子顕微鏡(TEM:Transmission Electron Microscope)、イオンプラズマ発光分析装置、X線回折装置などです。研究室にはこの他、気体分子吸着量測定装置、赤外分光分析装置、表面電位測定装置、全有機炭素測定装置など、様々な研究装置が備えられています。

「微粒子は面白いですよ。物質を小さくすることで大きな表面積をもち、全く違った性質を有する物質に生まれ変わるのですから」。「例えば」と教授が目を輝かせて実験してみせたのが、試験管中でシュウ酸鉄を還元して生成した表面積の大きく微細な鉄粉。空気中に振り出しただけで炎をあげて発火しました。広報担当者の驚きの表情を見て、満足そうにほほえみます。

「同じような物質が、わたしたちの身のまわりにもあります。例えば、細孔をたくさん有する炭素を粒状に成形したものが活性炭で、冷蔵庫の脱臭剤として『キムコ』や『ノンスメル』の商品名で売られています。使ったことがあるでしょう」

神鳥教授は、昨年10月、「平成22年第20回日本無機リン化学会表彰」の最高賞である「学術賞」を受賞しました。この研究室から、今後も新たなサプライズが生まれる予感がします。

※1ナノメートルは1メートルの10億分の1を表す長さの単位

一緒に成長できるのだって実感がありました。

生徒との交流を大切に

ー音楽科の教師をめざしているのですね。

長良　1年生全クラスを担当し、すぐに授業をやらせていただきました。「好きなようにやりなさい」って。ただ、最初の授業では、時間配分がうまくできず失敗でした。音楽科は実技ですから、できない生徒へのフォローを限られた時間内で調整していくのは難しいと感じました。

ーよかったことは何ですか。

長良　子どもたちと接することがすごく楽しかったです。一緒に成長できるという実感がありました。4月から大学院に進む予定ですが、学校現場がぼくに合っているのではないかと思っています。

ー面白いエピソードはありますか。

長良　生駒高校では古典音楽を学ぶ授業をしており、音楽科の時間に“篠笛（しのぶえ）”を指導していました。1週間前に知らされたときは「えー、早く言ってよ」という感じです。指導のマニュアル本はなく、入門DVDがあったので、一生懸命勉強しました。

それから、1年生の総合の時間に、同じ実習生6人が生徒260人を前に、進路選択について体験を話す機会がありました。わたしは、メモを見ながらマイクで話すことをせず、指導教員の先生から教えていただいた身振り、手振りをまじえての話を、マイクなしでしました。生徒が、真剣な表情で食いつくように聞いてくれました。生徒に話すこつがつかめたように思います。教師の仕事は授業だけではない。いろいろな業務があり、先生の仕事って大変だなと改めて感じました。

ー後輩へのメッセージを。

長良　生徒との交流を大切にしてほしいということです。親しくなれば授業の雰囲気づくりもスムーズになります。

●●● 昨年秋に実施された本学学生による教育実習の体験談をインタビューしました。（広報室） ●●●

GO! PRACTICE TEACHER!

INTERVIEW

教育実習学生奮闘記1

「みんなで子どもを育てようという雰囲気」学んだ

ー協力校はどのような学校ですか。

和田　研究モデル校になっていた学校で、来訪者にはきちんと挨拶ができる、落ち着いている学校でした。担当した2年生は遅刻する子もなく、宿題もきちんとこなし、授業もしっかり聞くことのできるクラスでした。

ー実習でよかったこと、困ったことはありましたか。

和田　担任の先生が親身に対応してくれる方で、わたしがやりたいことができるよう、忙しい中にあっても授業時間を確保してくれました。そのお陰で、研究授業だけで10時間も体験させていただきました。教科も国語や算数、音楽だけでなく、専門の図工の指導もできました。

しかし、クラスの中には、はさみがうまく使えない子どもや、学力面で遅れがちな子どもがいました。その児童のことも気にしながら全体の授業を進めるのが難しかったです。フォローをどうしたらいいのか、苦心しました。

また、言葉遣いや漢字の書き順で困る場面がありました。子どもたちは先生のいいところも、悪いところも真似するので、今から気をつけて直していくといいと思います。終わりの会にアンケートで「先生の授業、よく分かった」「楽しかった」と書いてくれました。本当に嬉しかったです。

ー後輩へのアドバイスを。

和田　子どもたちとの信頼関係が授業につながるということを、この教育実習でとても感じました。1日1日を大切にし、子どもたちにかかわってほしいと思います。どれだけ積極的にできるかで、教育実習は変わってくると思います。

4週間で教師の仕事をのぞき見たわけですが、子どもたちは地域の人も一緒になって育てるものだということを、先輩の先生から教えられました。また、学校行事でも学校全体で作り上げるもので、教職員のチームワークが大切なのだと痛感しました。

信頼関係が授業につながることを感じました。

生徒の目線に立って授業づくりに

ー私学で教育実習を体験したのですね。

吉田　関西大倉高校は、大学進学をめざす生徒が多い私立高校です。ホームルームクラスとして、3年生の特進理系コースを担当しましたが、ほとんどの生徒が受験を意識して頑張っています。

ー実習でよかった面は。

吉田　実際に学校に通い、生徒と接することで、なによりも充実感と楽しさを毎日感じることができました。実習中は睡眠時間が削られ、体力的にはきつい時もありましたが、朝、担当クラスの朝会に行き、生徒の顔をみると元気が出ました。また、実際に授業をすることで、授業づくりの難しさや、子どもたちや教育の現状を知ることができました。

「先生、授業楽しい」と言ってもらえた喜びは、一生の励みになります。

GO! PRACTICE TEACHER!
教養学科情報科学専攻
吉田 遼子さん
実習校
私立関西大倉高等学校

ー実習で工夫したことはありましたか。

吉田　学級内で学力の差（パソコンの知識）が大きかったことです。一人ひとりがパソコンを使う実習だったので、趣味でパソコンを触っている生徒はすぐにできるし、パソコンに触ったことのない生徒もいました。どちらの生徒も退屈になったり嫌になったりしないように授業をするのは難しいものでした。

ー後輩へのアドバイスを。

吉田　実習の2週間は本当にあっという間です。のんびりしているとやりたいことができません。実習が始まる前から担当単元の教材研究などの準備をしておくのがよいと思います。そして、実習をともなう情報などの授業では、まずクラスや生徒をしっかりと観察し、各クラスに合わせた授業計画を立ててほしいと思います。その際には、そのクラスの他の科目の授業を見学するのがお勧めです。クラスをまとめるうえでのヒントがつかめることがあります。そして生徒の目線に立って、理解させるための授業づくりに励んでほしいです。「先生、授業楽しい」と言ってもらえた喜びは、きっと一生の励みになります。

INTERVIEW 教育実習学生奮闘記2

GO! PRACTICE TEACHER!

「現場」を、身をもって感じました

ー附属幼稚園は一般の幼稚園と教育活動の内容が少し違っていると聞いています。

中西　幼稚園というと、みんなで一斉に絵を描いたり、工作したりするといった活動を想像されるかも知れません。しかし、附属ではそのような一斉活動はほとんどなく、子どもたちが自分の好きなことを思いきり楽しみながら活動していて、子どもたちの遊びを中心とする生活の流れをとても大切にしています。

ー実習でよかった点、工夫した点を聞かせてください。

中西　部分保育の機会が3〜4日に1回は必ずありますので、たくさん実践を積むことができます。大学での座学とは違う「現場」を、身をもって感じることができました。担当の先生から、子どもたちの生活の中からテーマを見つけ、教材を考え、指導案を書いて研究授業をするようにアドバイスをされ、何度も書き直して時間をかけ、悩みながらぶっつけ本番のように取り組んだときは大変でした。でも、すごく勉強になりました。準備にどれだけ時間をかけたのが勝負になると痛感しました。

ー後輩へのメッセージを。

中西　教育実習は、現場を事前に体験学習できる最後の機会です。まだ時間はあると構えるのではなく、今からでもできる準備をしておくことが必要です。例えば言葉遣いです。子どもに対する先生の言葉掛けの影響は大きいものがあります。また気をつけたいのが、子どものほめ方です。「すごいね」「すてきだ」と抽象的に言うのではなく、何がよかったのか、具体的な中身でアドバイスすることです。そのためには、一人ひとりの子どもをよく見ることが求められます。それから、指導の先生方から言われたことはしっかりメモを取る習慣をつけておくことです。後で必ず役に立ちます。

GO! PRACTICE TEACHER!
幼稚園課程
中西 咲子さん
実習園
附属幼稚園

INTERVIEW 教育実習学生奮闘記3

GO! PRACTICE TEACHER!

GO! PRACTICE TEACHER!
教養学科
文化研究専攻
欧米言語文化コース英語圏
向井 理恵さん
実習校
附属高等学校平野校舎

他の教科の授業も参考になります

ー実習でよかった面は。

向井　1年生と2年生の、英語科の授業を20回以上させていただき、それも、8〜9割を英語で進めることができました。授業の導入時に生徒のモチベーションを高めるため、ゲーム感覚を取り入れるという、わたしのやり方を、指導教員の先生が理解し、尊重してくださったのがよかったです。

　実習最後の日に、生徒からアンケートで「すごく楽しかった」などの好意的な感想をいただき、嬉しかったです。教壇に立つ自信がちょっぴりつきました。

好意的な感想をいただき、
嬉しかったです。
教壇に立つ自信が
ちょっぴりつきました。

ー実習で困ったことは。

向井　体調を崩してしまい、1日休んでしまいました。皆さんにご迷惑をかけてしまいました。知らず知らずにストレスがたまっていたように思います。

ー後輩へのアドバイスを。

向井　最初の1週間は授業見学なのですが、それをおろそかにしてはいけないと思います。自分の教科以外の先生の指導法がとても参考になりました。例えば、生徒の叱り方、発問の仕方、質問への対応の仕方、眠っている生徒の起こし方などです。

　それと、痛感したのは、分かる面白い授業を準備するとともに、生徒との人間関係づくりが大切だということです。最初、わたしの授業をあまり聞いてくれなかった生徒でも、仲良くなってくると、うまくいくようになりました。

　また、よく言われる、生徒の名前と顔を覚えることは、その通りだと思います。アルバムで照合するなど、自分の覚えやすいやり方で努力することです。

大阪教育大学で生きる学生の「今」がわかる。

STUDENTS NOW!

特集

平成22年度**「大学祭」**を10月30日(土)から11月3日(水･祝)まで
5日間の日程で開催しました。学生の感想と、写真で紹介いたします。

手品や演劇、
手づくりおもちゃに
子どもたちは
夢中!

大学祭

ニブ イン ワンダーランド
ようこそ夢の国へ
天王寺編

チーム対抗戦
白熱しました!

勉強会が
あるのも
二部ならでは

いらっしゃい!

人数は少ないけど
柏原に負けないくらい
盛り上がってます!

神輿祭
ドドーン!!
KAMISHIMO
UNIVERSITY LIBRARY
毎回かっこいい!
りんどうのよさこいも
エイサー隊も大人気!!
いい汗、かいてます。
学内はとてもにぎやか♪
すごい大きさ!手づくりプラネタリウム
実は人気者!
ポッキーマン参上!
学内のいろんなところでバンド演奏がありました!あちこち歌合戦!!

今年もたくさんの人で
キャンパスがいっぱいになりました!
たいやきは
長蛇の列が
できるほど!
おいしかったぁ
科学館は
おもしろい
ものばかり!
これ、電話・!?
楽しさ広がれ!
虹色キャンパス
柏原編
通訳者派遣中!
何でも聞いて
ください。
大教について。
しっかり教育を
研究しています。
みんな
楽しんでる〜!?
書道ガールズ
☆大迫力☆

馬頭琴の音色や華やかな民族衣装に注目

「第5回かしわら国際交流フェスティバル」

International exchange

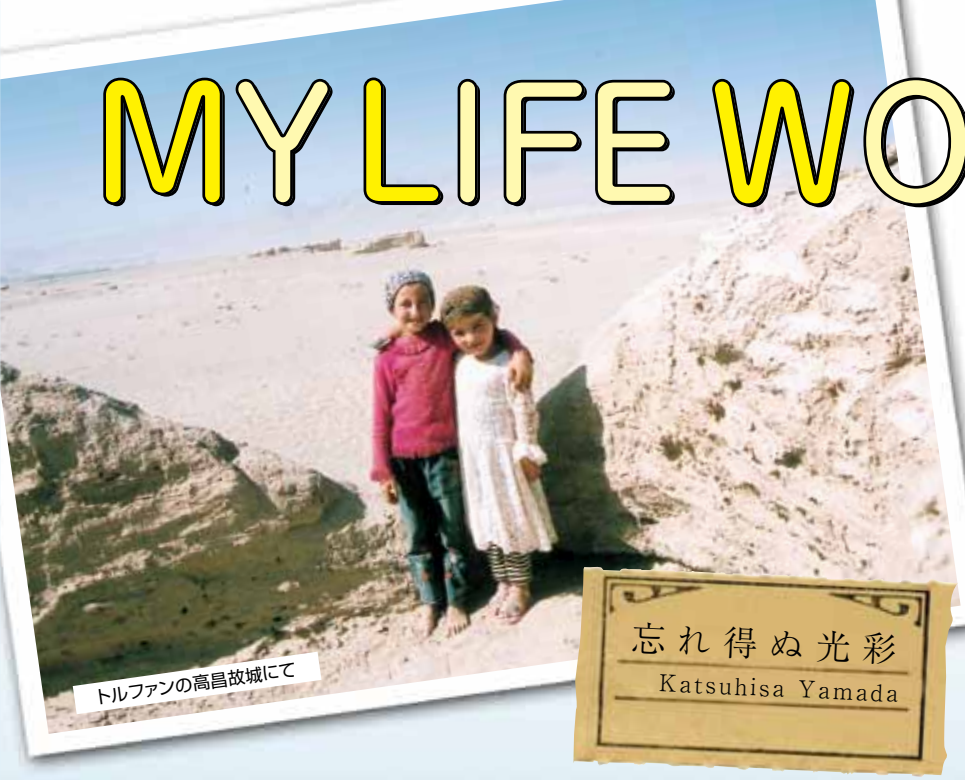
「第5回かしわら国際交流フェスティバル－世界にふれあう喜び、ここにあります!－」（大阪教育大学と柏原市との共催）が11月3日（水･祝）に柏原キャンパスで開かれました。本学留学生、学生、一般市民を合わせ600人が参加し、大勢の人で盛り上がり、市民の方々と留学生がふれあい、世界の文化を身近に感じる一日となりました。

音楽棟前メーンステージでは、本学留学生によるモンゴル舞踊、歌、テコンドーショー、柏原市留学生支援団体による着物着付けなどが披露されました。また、ケニア、コートジボワール、ウガンダ、モンゴルから馬頭琴演奏、民族舞踊や歌のステージ出演がありました。初めて聞く馬頭琴の音色や華やかな民族衣装に、観客は目を奪われていました。

会場にはモンゴルのゲル（移動式住居）を設置し、モンゴル茶を振る舞いながら母国の文化、暮らしについて紹介しました。最後には、本学のアカペラサークルのサウンド･スプラウトと参加者全員で“We are the world”を合唱しました。

MY LIFE WORK

〈VOL.2〉
本学名誉教授
山田勝久先生



トルファンの高昌故城にて

忘れ得ぬ光彩
Katsuhisa Yamada

山田先生は、平成5年4月に大阪教育大学の日本･アジア言語文化講座の教授に着任しました。それまでは北海道教育大学で16年間にわたって勤務し、その前は、東京の跡見学園女子短期大学で漢文学の教員として教鞭を執っておられました。

大阪教育大学在職中は、(常置)人事委員会委員長、学長補佐、そして附属池田中学校長などの職務に就任し、大学の発展に貢献されました。

出身は愛知県です。生家は戦国時代の合戦の舞台になった桶狭間の古戦場近くで、周囲には数多くの城郭が残っていました。通学した小学校も中学校も城跡です。幼い頃からこうした城壁や砦跡を見て育ったせいか、歴史や漢文が好きだったそうです。大学進学の時は、何のためらいもなく中国文学科に進み、卒業論文も修士論文も、唐の詩人･李白を取り上げました。

昭和40年から41年にかけて、李白の家系を調べていたところ、驚くことに中国ではなく西域が出生地であることを発見しました。キルギスのトクマク(砕葉)という町で西暦701年に生まれ、3歳の時、蜀の国、今の四川省成都に移り住んできたのです。

山田先生はキルギスから成都まで、李一族がどのようなルートで移動してきたのか、強く関心を抱きました。そして、自らその移動の道程を調査しようと思い立ち、キルギスからウズベキスタン、そして、中国･新疆とチベット自治区を調査し、とうとうその移動ルートを解明し、論文と著書で公表しました。

その間、シルクロードの総合的研究のため、カザフスタン、ネパール、インド、シリア、ヨルダン、トルコ、ギリシャ、イタリアなど12か国、52回のシルクロード踏査を重ねてきました。アレクサンダー大王や釈迦の生まれた家も訪問したとのことです。また、平成20年の夏は、モンゴルから甘粛省に出て、張掖というオアシスの黒水古城を調査し、朝日新聞のトップ記事に扱われ、注目されました。

平成21年に大阪教育大学を定年退職したあと、私立大学の副学長に就任されました。また、NHK文化センターの名古屋と西宮の「シルクロード」担当講師、柏原市公民館運営審議会の会長、大阪府立住吉高等学校「学校協議会」の会長、東洋哲学研究所委嘱研究員等々、全部で16の職を兼ねている多忙さです。海外からの招へいも多く、昨年8月下旬は北京へ、今年2月上旬はインドの国際学術討論会で研究発表することが決定しています。

「肉体的老衰はあっても、精神的老衰はない」「壮子西に行く、その志は千里に在り」という言葉通りの生き方をされてきました。今後、ますます生涯青春の気概に燃えて、さらに研究と教育に精励する決意を示されています。

最果てのオアシス疏勒国(カシュガル)のモル仏塔

卒業生CATCH!

CATCH! Yasuhiro Komori

教師とサッカー指導。両方とも、「一所懸命」

小森 康裕さん ［小学校教員養成課程 1988年卒］
河内長野市立天野小学校教諭

- 1988年‥大阪教育大学大学院入学
- 1989年‥河内長野市立川上小学校教諭
- 1994年‥同　美加の台小学校教諭
- 2002年‥同　天野小学校教諭

「本校の学力向上への取り組みは、授業に向かう子どもたちの“学習意欲”を培うことに着目しています。知識を得ることに喜びを感じ、試行錯誤をいとわない子どもを育てるためです。そのための教材をいろいろと開発しています」

パズルやクイズ形式を取り入れたプリント、知識を楽しみながら覚える“これ本”、ICT教材など、休み時間や家庭でも、子どもたちが楽しんで取り組むことで論理的思考力や知識などが自然と身につくように工夫されています。教材は“天野小出版”としてCD化され、すべての教員が使うことができるようになっています。今年度から実施されている“朝学習”の時間では、全校をあげて取り組まれるようになりました。

小森教諭は44歳、教職員のミドルリーダーです。卒業当時の1988年は、大阪府の小学校教員の採用数は20人しかありませんでした。“大量退職･大量採用”の今では想像もできない“教員受難”の時代でした。大学院に進み、1年間在籍。翌年度、念願の小学校教員としてスタートすることができました。

最初の赴任校が河内長野市立川上小学校。赴任当初から、地元の少年サッカーチームに誘われ、少年サッカーの指導に携わってきました。しかし、この川上小学校の卒業生が進学する中学校では、当時、サッカー部がなかったそうです。そこで、小学校を卒業した子どもたちが中学校にあがったあとも、問題行動に走ることがないよう、受け皿になるサッカー部をと、川上FCジュニアユースクラブを設立したそうです。

ところが、**「サッカーをする場所があれば、子どもたちは真っ直ぐ育つだろうという考えは、大変甘いものだと気づかされました。“オフザピッチ”の指導をしっかりしないと、チームとして成り立たない」**。紆余曲折はありましたが、オフザピッチの改革に取り組んでからは、チームも変わってきました。現在では、地元の河内長野、近隣の市だけではなく、堺市や大阪市からも通う大所帯のチームになっているそうです。

サッカーを通じて地域の子どもたちを見守り続けています。学校では「態度教育」（姿勢十訓、挨拶十訓、言葉遣いの定着など）の必要性も提唱し、学校全体で実践。普段の授業から子どもたちに生き方を語ることのできる教師として、卒業生の保護者らから絶大な信頼を受けています。

「前向きの姿勢で、物事に接することにより、子どもの心の中に次のステージへ行こうとするモチベーションが高まります。努力によって得られた結果は自信となります。勉強でも、できるようになりたい、わかりたいという学習意欲が最も大切なのだということを痛感しました」。サッカーの指導経験は、仕事に阻害になるどころか、小森教諭の教師としての幅を広げてくれているようです。

「大学も企業も学校も入ることがゴールではありません。入ってからが勝負なのです。若い自分に何ができるのか、日々考え挑戦する教師になってほしいのです」と、後輩へエールを送ってくれました。

パズルやクイズ形式を取り入れた「これ本」、ICT教材、プリントなど楽しい教材がたくさん

CATCH! Hiroko Matsumoto

音楽の楽しさ伝えたい

松本 寛子さん ［小学校教員養成課程1998年卒］
池田市立細河小学校教諭
（音楽担当）

■ 1998年‥南河内郡河南町立河内小学校教諭
■ 2003年‥池田市立細河小学校教諭（音楽担当）

「今から音楽の授業をはじめます」
「よろしくお願いします」

先生のピアノ伴奏で、4年1組21人の子どもたちが生き生きと歌い始めました。**「最初の5分で、子どもたちを全員、学びのステージに乗せることが大切だと考えています」**と語る松本先生。新しい学習教材『友だちシンドバッド』の導入では、曲の元になる『アラビアンナイト』の読み聞かせをして曲へのイメージを膨らませました。子どもたちは、先生の範唱の後、2回の音取りで歌えるようになりました。「この曲はどんな気分で歌えばいいかな?」という問いにも、「元気に」「明るく」「やるぞ!という気持ちで」と口々に答え、体を揺らしながら、メロディーにのって楽しそうに歌っていました。

松本先生の音楽の授業は展開が早く、歌唱『心から心へ』『夢の世界を』、リコーダー奏『オーラリー』と、この日の授業でも4つの曲が盛り込まれていました。様々な活動の中で、子どもたちが「音楽が好き」という気持ちになってくれたらという願いが強く感じられました。授業では、「お腹の下の方に力を入れて」「優しい気持ちで」と次々に声をかけ、目配りや励ましなどで、子どもたちを支援していきます。授業の終了を告げるチャイムと同時に、予定されていた活動がすべて終わり、子どもも教師もしっかり学んだという満足感に満ち溢れていました。「もっと歌いたい!演奏したい!」そう思わせる余韻のある授業でした。**「授業で習った歌を休憩時間や帰り道に口ずさんだり、『お風呂でよく歌っています』と保護者の方から連絡をいただいたりすると本当に嬉しいですね」**

教師をめざしたきっかけをうかがうと、**「大好きな音楽の楽しさを人に伝える仕事ができたら…」**との答え。3歳からピアノを習い、一時は演奏家を夢みたこともあったそうですが、「独りでやる音楽ではなく、人と関わりながら音楽をやりたい」という想いや、教育実習での子どもたちとの出会い、小学校4年生の時の素敵な担任の先生への憧れもあったと話されました。

新任の小学校では、5年間学級担任をしました。**「教師として未熟で、失敗の連続でした。学級経営がうまくいかず悩んだ時もありましたけれど、周りの先輩の先生方にたくさん助けられました」**と当時を振り返られた言葉に、今の松本先生の基本があるのだと思います。**「子どもの可能性は無限大。指導者の勝手な思い込みで、子どもの可能性を見切ってしまわないように心がけています」**と語る姿に、教師としての熱い思いを感じました。　教師をめざす後輩へは**「失敗してもあきらめないこと。失敗から学ぶことの方が多い。教師に成り立ての頃は誰でも大変。先輩や同僚に助けてもらいながら一歩一歩教師として成長していくもの。何かあれば、それをチャンスと思って前向きに!」**とメッセージを送ります。前任校で担任した経験が音楽専科となって大いに生かされていることは、この日の授業からもうかがえました。

松本先生が音楽専科の教諭として細河小学校に来て8年。給食前に職員室で子どもたちが歌ったり演奏したりする「ランチタイムコンサート」や子どもと大人が一体となって楽しむ「音楽集会」や金管クラブ等、校内はもちろん地域でも、子どもたちが音楽で自分を表現できる活動の場を広げています。

「本校は、子どもたちが落ち着いて学習に取り組めない状況の時もありましたが、松本先生を中心に音楽の力で子どもたちの心がつながっていったことが再生への大きな力となったと思います」と西村章校長は頼もしげに語られていました。プライベートではゴスペルのクワイアで演奏しています。**「みんなで音楽をすることがこんなに楽しいことなのだと日々感じています」**。その楽しさを子どもたちに伝えたいという想いが、今回の学校訪問でひしひしと伝わってきました。

卒業生CATCH!

CATCH! Mitsushige Zouraku

人と出逢い、生徒から学ぶ

蔵楽（ぞうらく） 充重さん ［保健体育専攻1988年卒］
松原市立松原第六中学校教諭

- 1988年‥松原市立松原第三中学校講師
- 1989年‥貝塚市立第四中学校教諭
- 1994年‥松原市立松原第三中学校教諭
- 2000年‥松原市教委社会教育課（松原市青少年会館主幹）
- 2002年‥松原市立松原第三中学校教諭（生徒指導主事）
- 2008年‥松原市立松原第六中学校教諭

「中学生時代、人をはねのけるような生き方をしていました。周りに反抗し突っ張っていました。一歩間違えば、転落の人生を歩んだかもしれません」

中学時代からラグビーに明け暮れました。**「やんちゃはしましたが、チームメートや仲間によって支えられていました」**。ラグビー部を指導できる教師になろうと大学に進学。**「ラグビー漬けの学生生活を送ろうとしたのに…　池田分校五月ケ丘寮に入ったのが運の尽き」**と苦笑い。当時、寮には、被差別部落出身や、障害のある学生など、様々な困難を抱えながらも教師をめざす仲間がたくさんいました。その生き様を、酒を酌み交わし膝交えて聞きました。**「ラグビーのきつい練習を終えて、へとへとになって戻った夜に、寮の会議や人権学習。眠いのに何でこんなん聞かなあかんねん。寮なんかいつでも出ていったる。そんなことをしょっちゅう言っていました」**

「反逆児でした」といいながらも、どういうわけか去りがたく、結局5年いました。教師の卵を特訓する“虎の穴”のような魅力があったのだと思います。ターニングポイントとなったのが、重度の脳性麻痺のある森修さん（本学非常勤講師）との出逢いでした。介護者を求めてオルグに回る森さんの姿に**「必死に生きている。すごい人だ」**と感動したといいます。日本人だと思っていた友人が、学園祭でチマチョゴリを着て在日韓国人の立場宣言をしたことに衝撃を受けたこともありました。**「ぼく自身、仲間を求めていたのです」**

次第に在日朝鮮人問題、被差別部落問題、障害者問題などの人権サークルに関わり、運動に深く関わっていきました。この頃から、松原市内で部落解放子供会などの指導にも携わりました。卒業後、貝塚市内の中学校教諭を経て松原第三中学校に勤務しました。**「講師も含めて三中には計15年間在籍し、教師として育てていただきました」**

六中は3年目。今の3年生が、1年生の時に「いのちの学習」（総合学習）を担当。学習活動の総仕上げとして共同制作を提案しました。学習のなかで見つめ直した命への思いを、一人ひとりの生徒が家族への感謝の気持ちとして表したものです。

「お父ちゃんお母ちゃん、産んでくれてありがとう」。子どもたちが大切にしている『思い出の1枚の写真』を持ち寄り、ペンで絵取ってイラストを描きました。その1枚1枚を、大きなパネル（縦3m、横6m）に貼っていきました。パネルの真ん中には『信頼』の大きな文字が埋め込まれています。いま、1階職員室入口の廊下に貼り出され、来校者の目を引いています。（写真）

低学力と非行の“負の連鎖”を断ちきろうと、1年生を対象に、コンピュータを活用した学力保障「六中学習くらぶの実践」にも取り組んでいます。校務分掌は、生徒指導主事のほか新任指導教諭、子ども支援コーディネーターの仕事を受け持っています。クラブはバスケットボール部顧問を担当。**「生徒たちが道を外すことのないよう、日々、やんちゃ生徒にまっすぐ向き合っています」**

教師をめざす後輩へのアドバイスは、**「1つのことをこつこつとやり続け、努力することを忘れないでほしい。そこから必ず見えてくるものがあります」**

CATCH! Atsushi Wada

自分に向き合い、自ら道を切り開く

和田 淳さん

［教養学科 芸術専攻 美術コース 2004年卒］
短編アニメーション作家

1980年‥神戸生まれ
2004年‥教養学科芸術専攻美術コース卒
2005年‥イメージフォーラム映像研究所卒
2010年‥東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻修了

ファントーシュバーデン国際アニメーション映画祭(スイス)『わからないブタ』最優秀賞
2010年度文化庁メディア芸術祭「アニメーション部門」優秀賞
DVD「和田淳作品集2002-2010」
インターネットショップCALFにて発売中　http://calf.jp/

http://calf.jp/

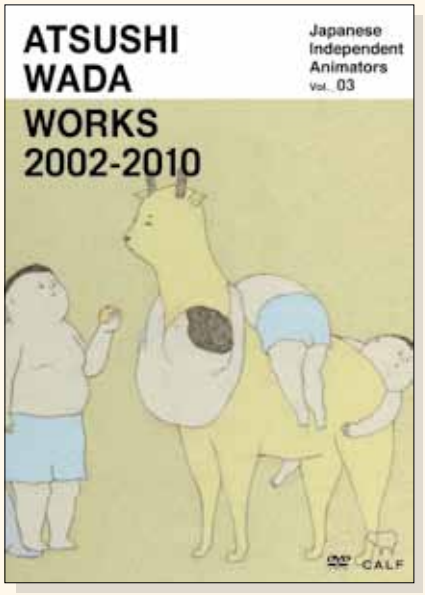
「作り続けること、それが目標です」

短編アニメーション作家、和田淳さんは力強く語ります。2002年から作品を発表しています。しかし、国内での短編アニメーションは、認知度が低いといいます。制作には手間も時間もかかり、金銭的にも「作り続ける」ことが難しい環境です。

和田さんの作品は、独特のタッチの絵と絶妙な間が特徴のアニメーションです。すべて手描きの鉛筆で表現され、CG等は使いません。その作風は、すでに世界各国で高い評価を受けています。作品はフランスやクロアチアなどの映画祭で上映され、スイスのファントーシュ国際アニメーション映画祭ではグランプリを受賞しました。さらに、最新作『春のしくみ』はベネチア映画祭オリゾンティ部門にノミネートされ、話題を呼びました。

また、映画『ゲゲゲの女房』のアニメーションパートの担当や、無印良品のポスターイラスト制作、オタワ映画祭で審査員を務めるなど、活躍は多岐にわたります。新しい試みにも積極的で、世界で評価されながらもソフト化されていない映像作家の作品を世に発信するDVDレーベル「CALF(カーフ)」に設立時から参加しています。そのCALF配給・宣伝で昨年11月には、自身初となる映画館での1週間の特集上映「和田淳と世界のアニメーション」を企画し、反響を呼びました。

「作り続けるためにも、より多くの人に短編アニメーションの魅力を知ってもらいたい」



そのために国内に限らず世界各国を飛び回り忙しい毎日を送っています。

しかし、大学に入った頃まではアニメーションに全く興味はありませんでした。きっかけは3回生のとき、ノートのすみに描いたラクガキでした。ふと『これが動いたらおもしろいのではないか』と思い、「自分で描くことで、思う通りの世界を表現できる」ことに魅力を感じたそうです。

アニメーションの基本は、パラパラ漫画のように少しずつ動いた絵を描くことです。そのため1枚1枚絵を透かしながら描きます。しかし、大学には基本を教えてくれる授業も、必要な道具もありませんでした。何をするにも手探り。蛍光灯で紙を透かして描いたり、紙がズレないように手で押さえたり、本当に正しい作り方なのか不安だったといいます。しかし、周りの応援とアドバイスのお陰で続けてこられました。また、同級生と定期的に展示会を開き、互いの作品をみせあいました。

「大教での学生生活は、友人たちと刺激しあい、自己表現を磨くとても大事な時間になりました」

2007年からは、非常勤講師として本学でアニメーションを教えています。授業では、アニメーションの元祖とも言える「驚き盤」の作成や、実写をコマ撮りするピクシレーションなど様々な手法の表現を教え、少しでも興味をもつことができるように工夫しています。それは、ただなんとなく単位のために授業に出ていることをもったいなく感じるからです。

「せっかく大学にいる限りは、何でも吸収することができるし、してほしいと思います。そのためにも、自分が何をしたいのか、日々自分と向き合って葛藤してほしい」

自分と真摯に向き合い、自ら道を切り開いていく姿勢は、芸術活動に限らず多くの学生に刺激を与えるでしょう。

附属学校園ウォッチ

校種間連携型の一貫教育をめざす

平野地区五校園が共同研究初年度の成果を発表

生涯発達的視点に基づく校種間連携型の一貫教育をめざし、本学附属の平野地区五校園は11月6日(土)、同校園を会場に共同研究発表会を開きました。「ことば・体験・コミュニケーションで『考える力』を育てる保育・授業創り−アセスメントを活かした支援・指導のあり方を探る−」が主題で、約600人の教育関係者が参加しました。

平野五校園では、学びの連続性を15年にわたり追求し、幼稚園から小・中・高等学校に至る縦の連携、特別支援学校との横の連携を通して、全国にも例のない五校園の連携型一貫教育を推進しています。今年からは大学との共同研究を開始し、初年度を基礎研究期間と位置づけ、各校園の「つながり」のあり方を模索しようと、教員間の相互交流、共同の研究授業などを進めています。

まず附属高等学校平野校舎で、1年生3クラスの授業が公開されました。その中の1クラスでは「いのちを考える」をテーマに、生殖医療・終末医療について生徒が賛成・反対の立場に分かれて熱のこもったディベートを繰り広げ、参観者の注目を集めました。その後、幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校の保育、授業を公開しました。どの教室も参観者であふれ、教科・領域別分科会でも熱気のこもった研究協議が展開されました。

シンポジウムでは「21世紀の知識基盤社会に生きる力を培う学校をどう実現するか」をテーマに、本学の木原俊行教授(実践学校教育講座)がコーディネーターを務め、本学の成山治彦理事と上村逸子教授(特別支援教育講座・附属特別支援学校長)、京都産業大学の西川信廣教授、そして、附属平野中学校研究主任の池永真義教諭の4人が討論しました。

自立し協同する力を育む教育

附属高等学校池田校舎が公開授業研究会

本学附属高等学校池田校舎は11月26日(金)、同校で「平成22年度公開授業研究会」を開きました。

本学の池田地区の附属池田小学校、附属池田中学校と池田校舎では、2009年度から「自立し協同する力を育む教育−コミュニケーション力を基盤として−」という共通テーマのもとに、それぞれの発達段階に配慮をした大学との共同研究に取り組んでいます。

池田校舎では、各教科の教育研究活動だけではなく、2003年度からユネスコ協同学校(ASPnet：Associated Schools Project network)に加盟し、アジア諸国および国内のユネスコ協同学校との相互交流・学び合いなどを通じた国際教育を進めています。

研究会では、保健体育科と総合的学習(国際教育)という2教科の授業を公開し、教育研究活動の一端を披露しました。

保健体育科は、新学習指導要領ですべての生徒に履修させることになった「体つくりの運動」を取り上げ、「コミュニケーション力」と「体つくり」の両面からアプローチした2年生女子(24人)の授業を公開しました。授業者は保健体育科の大松敬子教諭で、「バランスボール」を用いた指導の仕上げとして、グループで考えた作品を完成させるために、生徒が互いにアドバイスをしながら、音楽に合わせて創作練習に取り組みました。

また、総合的学習(国際教育)の公開授業は2年生130人を対象に行われました。授業者は、吉村勇治教諭が担当しました。この授業は、池田校舎が取り組んだ、大阪大学や府内および中国・韓国・フィリピン・タイのユネスコ協同学校(ASPnet校)と共同開発した「ESD国際協力カリキュラム」試行版の実践です。具体的には「持続可能性を阻害していると考える、あるいは持続可能性を深めていると考えられる現在の状況を表す写真とデータから『何が言えるのか』、同時に同じことや類似のことが身近に起こっていないか」というテーマで、4、5人のグループごとに話し合い、発表し合いました。

NEWS

附属池田中学校(学校新聞)、平野中学校(PTA新聞)が入賞

第59回学校・PTA新聞発表会(大阪中学校新聞連盟など主催)の入賞校がこのほど決まり、知事賞には、学校新聞の部で大阪教育大学附属池田中学校、PTA新聞の部で同平野中学校が選ばれました。

附属高等学校天王寺校舎SSH

平成22年度の学習成果を発表

附属高等学校天王寺校舎は12月18日(土)、柏原キャンパスで平成22年度·第2回「科学のもり」生徒発表会(SSH研究成果報告会)を開き、口頭発表、ポスターセッション合わせて53の研究テーマが発表されました。

SSH(スーパー·サイエンス·ハイスクール)は、将来の国際的な科学技術系人材の育成をめざし、理数系教育に重点を置いた平成14年度から始まった文部科学省の研究開発事業です。本年度は全国で125校が指定され、大阪府内では10校、本校は21年度から5年間の研究開発をスタートさせています。

発表会には府内·近隣の中学、高校生およびその保護者、SSH研究開発指定校の教職員、教育関係者ら約310人が参加しました。初めの全体会で、主催者を代表して附属高等学校長の畦浩二教授が「SSHの活動を通してグローバルスタンダードの人間育成をめざしていきたい」と挨拶。続いて附属学校園担当の成山治彦理事が「日本人2人のノーベル化学賞に続く研究者が、SSHの生徒から出ることを期待しています」、附属学校部長の米川英樹教授が「国際社会に貢献するという気概と意識をもって勉学に励んでほしい」と生徒たちを激励しました。

各教室での報告会では、1·2年生による課題解決型の探究活動「プルーフ」(学校設定科目)、3年生による社会的、倫理的視点を養う「生命論」「環境論」の学習活動を発表しました。このうち、「生命論」では「死との向き合い方〜ホスピスを通して〜」など、日本社会で命のあり方について議論されているテーマに真正面からアプローチしました。

「環境論」では、「『自然』を考える〜シカよけネットの現状から〜」など、環境問題を真摯に捉えたテーマを発表しました。進行は、生徒たちが担当し、同じく府内のSSH研究開発校である府立北野、高津両高校の生徒たちも発表に加わりました。

大ホールでは生徒による「ポスターセッション」がありました。「揺れ動く大地と私」など、29にのぼるテーマが発表され、生徒たちは大阪教育大学の研究者らに対して真剣な表情で説明していました。

まとめの全体会では、生徒発表について大阪大学副学長の高杉英一、本学教授の山口弘、定金晃三、片桐昌直の4氏ら運営指導委員が「グループの仲間とコミュニケーションを取り大変素晴らしい発表だった。理科離れの問題を扱ったのも、教育大学の附属高校らしい取り組み。プレゼンテーション力を磨けばさらによくなります」と講評しました。

今回初めて柏原キャンパスを会場に開かれたとあって、SSH運営指導委員、指導助言の教員らのほか、本学教員10人が評価し、優秀発表が表彰されました。

天遊twitter

てんゆうツイッター

■8月に出された今年の人事院勧告は、賞与のカットや中高齢層職員の俸給表の引き下げなど、ここ数年の減額改定を踏襲する内容でした。本学の給与体系·給与制度は法人化以降も国の制度に概ね準拠することとして取り扱ってきましたので、本勧告内容を本学の体系·制度にほぼ等しく落とし込むことについて、規程の整備や職員組合との協議等の手続きに危惧と憂慮の日々を送ってきました。なによりも、今回は、勧告の内容よりもその取り扱いの行方を考慮しなければなりませんでした。民主党がマニフェスト(政権公約)に掲げてきたのは「総人件費2割削減」でしたし、菅直人首相は9月の民主党代表選で「勧告を超えた削減をめざす」と公約していました。様々な議論があったようですが、11月1日に至ってやっと、時間切れのような形で、「人事院勧告どおり」の改正給与法案が閣議決定されました。明らかに異なった方向での決着ですし、衆参ねじれ国会で本法案の行方が憂慮されましたが、これも土壇場の11月末に可決·成立しました。そのような経緯のなかで、本学の給与規程の改正は、数回の職員組合との交渉を経て、「特例として、今年12月分賞与については現行ベース支給」という、一部改正給与法とは異なる措置を導くこととなりました。本学の今後の経営状況にかんがみ、引き続き良好な労使関係を保持することが最重要と判断したことによります。

■さて、菅直人首相は、年明けの次期通常国会に国家公務員給与を人事院勧告より引き下げる新たな給与法改正案を提出する意向を表明しています。危惧と憂慮の日々が続きます。

(理事·岩川雅士 11月30日記)

〈キリトリ〉

天遊vol.16アンケート

※該当する番号を○で囲んでください

●本誌をお読みになってのご意見·ご感想などをお聞かせください。

●本号でよかった記事を下から選んでください。
(3つまで。その他は具体的にお書きください。
【　　】【　　】【　　】
(その他　　)

①新春座談会
②ラボ訪問
③教育実習学生奮闘記
④STUDENTS NOW!特集
⑤MY LIFE WORK
⑥卒業生CATCH
⑦附属学校園ウォッチ
⑧TOPICS

●取り上げてほしい記事がありましたらお書きください。

●本誌に対するご意見などをお書きください

〈キリトリ〉

OSAKA KYOIKU UNIVERSITY'S TOPICS

2011年1月発行 企画・編集・発行／国立大学法人大阪教育大学企画課広報室 〒582-8582大阪府柏原市旭ヶ丘4-698-1 TEL.072-978-3344 FAX.072-978-3225 E-mail kouhou@bur.osaka-kyoiku.ac.jp

06

06 「今、英語教育に何が必要なのか?」

ヘンミ氏を講師に迎え 小学校外国語活動で講演会

「小学校英語活動において必要な英語力と指導力」と題した講演会が昨年11月12日、柏原キャンパスで開かれました。ブリティッシュ・カウンシル東京センターのシャンタール・ヘンミ氏を講師に迎え、すべて英語で進められたもので、約70人が参加しました。

平成21年度の文部科学省『大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム』に採択された『教える「英語力」向上プログラムの構築』の一環として実施されたものです。今回は、来年度に迫った外国語活動の導入に向け「今、英語教育に何が必要なのか?」について問題提起し、小学校英語活動に必要な視点を参加者が実際に体験してもらうのがねらいです。

ヘンミ氏は、コミュニケーション能力を高める素地を作るための探求や子どもたちにとって必要なスキルをドリル、ことば遊び、ゲームなどでどのように身につけさせたらいいかなど、体験談も含めて語りました。また、子どもたちにとって「現実に起こりえる可能性のあることを学ぶ大切さ」を指摘し「『This is a pen.』を使用する機会が果たして子どもたちにあるのだろうか?」など、日本での「教室英語」の問題点も投げかけました。学生たちはグループに分かれ、英語で意見を交換、授業を想定し、実際に身振り手振りを使い、子どもたちに分かりやすく伝えるにはどうすればよいかなど、ワークショップで学びました。

参加した学生からは「最初は、すべて英語での講演と聞いて驚きました。意味を理解できるか不安でしたが、先生の英語が分かりやすかったので、最後まで興味をもって楽しく聞くことができました」などの意見が寄せられました。

本学では、2月6日(日)に「これからの小学校外国語活動ー必修化を目前にして、これだけは伝えたいー」を開催します。詳しくは「教える『英語力』向上プログラムの構築」webページへ。

「教える『英語力』向上プログラムの構築」webページ
http://www.bur.osaka-kyoiku.ac.jp/kikaku/program/egp/

07

07 女子ハンドボール部が初のインカレ全国制覇

本学「体育会」女子ハンドボール部(顧問兼監督=土井秀和・教養学科スポーツ講座教授)が昨年11月23日、創部以来初めて、念願のインカレ全国制覇を成し遂げました。大阪市中央体育館で開かれたハンドボールの女子第46回全日本学生選手権で、ともに初優勝をねらう大阪体育大学(大体大)を降しての快挙です。

全日本決勝へは3度目の挑戦です。05年には武庫川女子大学、09年には東京女子体育大学に阻まれました。また、関東勢以外の優勝は2005年の武庫川女子大学以来2校目となり、国立大学法人としては過去10回優勝経験のある強豪・筑波大学と本学だけです。

決勝の大体大は、7月の西日本学生選手権決勝で敗北を喫したライバルです。敗北を教訓に、負けた要因でもある基礎体力の差を克服しようと、選手が自発的に早出で走り込みを重ねました。その成果が、後半での粘りにつながりました。

同監督にとっても初の全国大会優勝。「もちろん選手たちの努力もありますが、熱烈な声援を送ってくれた本学学生と保護者の皆さまの力が大きい」と話します。

〈キリトリ〉

料金受取人払郵便

柏原支店
承 認
45

差出有効期間
平成23年12月
31日まで

切手不要

郵便はがき

5 8 2 − 8 7 0 5

(受取人)
大阪府柏原市旭ヶ丘4−698−1

大阪教育大学企画課
広報室行

〈ニトリキ〉

※該当する番号を○で囲んでください

あなたの職業を教えてください

①本学関係者　②高校生　③小学校教員
④中学校教員　⑤高等学校教員　⑥教育委員会関係者
⑦他大学教職員　⑧他大学学生
⑨その他(　　)

①と答えた方は以下から該当する番号をお選びください

①学生　②大学教員　③大学職員
④大学保護者　⑤大学卒業生　⑥附属学校生
⑦附属学校教員　⑧附属学校保護者　⑨附属学校卒業生
⑩名誉教授　⑪その他(　　)

本誌にご意見をお寄せください。

広報室では、今後の誌面作りに皆様のご意見を積極的に取り入れていきたいと考えています。ご感想やご意見、大阪教育大学についてお知りになりたいことなどを、はがきまたはwebアンケートでお聞かせください。

天遊vol.16
webアンケート

「天遊」とは

「天遊」は、荘子の言葉から引用されたもので、人間の心の中に自然に備わっている余裕をあらわしています。キャンパス統合移転の記念に旧師範学校以来の同窓会3団体から寄贈された記念碑に銘文として刻まれています。記念碑の揮毫は、水嶋昌(山耀)本学名誉教授によるものです。

本紙は再生紙を使用し、環境にやさしいベジタブルインキで印刷しています。
この印刷物は、15,000部を920,000円で、すなわち1部61円で作成しました。

VEGETABLE OIL INK